

## 〈全体会〉 [問題提起]

### ・教育学的・社会学的観点から

センター教授 藤田 英典

### ・スクールカウンセリングの観点から

センター教授 亀口 憲治

### ・いじめ体験の個別的調査の観点から

埼玉大学教育学部助教授 堀田 香織

藤田：マン先生のお話を伺いながら、いじめの対応に関する日本の特徴のようなものを感じた。第一に、10年前までは「いじめは日本だけの問題である」とされ、いろいろと制度が変えられた。第二に、スコットランドでは国家レベル的な取り組みがなされているが、日本は個々の教師、個々の学校にゆだねられている部分が多い。また、スコットランドでは、政治家やマスコミへの働きかけをしている。第三に、イギリスの方が実践的、合理的な対応をしようとしている。

以上のことから、私は日本のいじめに対する取り組み方を見直す必要があると感じた。

いじめは日本だけではなく、ほとんどの先進諸国で抱えている問題である。原因は大変複合的で、むしろ、現代の社会問題と捉えた上で、学校に、また教育に何ができるかを考えるべきだと思う。

学校は何かを変えていくことができる。それは原因が学校だけにあるから変わらなければならないというのではなく、学校や教師にしか頼ることができないのである。今、系統的な、システマティックな対応をとれるのは学校、教師でしかない。

いじめのタイプを「教育改革」(藤田英典著、岩波書店)で、4つに分けている。一つ目は1980年代前半から80年代半ばにまでに起こったいじめで、高校入試の拡大とともに、内申書教育や、受験教育が急速に問題化したことから起こったもので、アノミー的、集団ヒステリックで、モラルパニック的なものである。二つ目は、社会的差別にもとづくいじめである。三つ目は、クラブや仲間集団の中で起こるいじめである。これに対する対応の仕方が今一番問題になっている。四つ目は、脅しや恐喝やリンチといったようなむしろ犯罪と捉えた方が適切なものである。

いじめの問題に対するアプローチの仕方については4つある。一番目は治療的アプローチで、いじめられた子

どもや、いじめた子どもの様々な心のケアをしていくもので、スクールカウンセラーの配置といった事後的なものである。二番目は懲戒的アプローチで、いじめの加害者に対し様々な懲戒、懲罰を加えるという方法である。三番目は、環境的アプローチで、学校を含めた子ども達の生活環境を改善する。子どもを分離したり、学校、教室を保護者などがパトロールしたり、あるいは危険な地帯をなくしたりするなどといった対応である。4番目は、教育的アプローチで、教師や学校が子どもと一緒にあって、いじめというものをどのようになくしていくべきかを考え、いじめのない学校作り、学級作り、仲間作りをしていく、といった啓蒙的な活動、あるいは子ども達の心を開いていく活動である。そして、この教育的アプローチが最も期待されている。

亀口：不登校、家庭内暴力といった問題をもつ子ども達を対象にした家族療法をする中で、子ども達の問題が、単にその主訴、問題を抱えている子どもだけでなく、その親との関係、あるいは、両親の関係、あるいは3世代の祖父母も含めた関係が背後にあることが分かった。

そして教師は、個々の子どもや家族が抱える問題といった家庭の状況をよく知らないままに、生徒との間でいろんな摩擦、食い違い、誤解が生じていた。具体的にはいじめの問題、あるいはいじめを苦にした自殺という事例がある。

現在、東大の附属中高一貫校にスクールカウンセラーとして行っているが、カウンセリングルームでじっとだけしては、生徒のごく一部としか関われないと思い、今年度、ホームルームの時間を使って全クラスを訪問した。個別に面接していく中で、今の中学生、高校生、あるいは先生方の苦勞、悩みを知ったが、教室の中で、40名弱の子ども達に対峙したときの実感と、それとは大きな差があった。今の思春期のまっただ中にいる子ども達の集まるクラスに入った時、その場にいないならばこの雰囲気は分からないと痛感した。端的に言うと、子ども達は人の話が聞けなくなっている。私が入って行って、「さあ、今からこういうことをやろう」という最初の趣旨説明をすること自体ができない。個々の子ども達の病理でなく、ごく平均的な中学校、高校のクラスが抱える現状である。先生達はその状況の中で日々格闘されている。単純に怠けているとか、ふざけているということではなく、様々な要因で生徒達は追い込まれている。だからこそ、先生達も追い込まれ、かなりの限界に来ている。

以前から、家庭と学校との連携は、実質的にはできていないと思っていたが、やはり実践はものすごく難しい。

私自身も、大学から教員として附属学校に出かけていった連携をする立場にいるが、その連携がいかに大変かを身をもって体験したことから思う。そして、このような連携の必要性和現実の困難さを考えたとき、私は、「日本の父親の役割放棄」を思う。個々の父親の怠慢とか、能力とか、資質とかではなく、日本の社会総体が基本的な役割を放棄しているように実感している。

福岡市のPTA団体が三年前、福岡県内の小、中、高校生を対象に調査研究をした。その結果、自分がいじめられた時の相談相手として、大多数の子どもたちは友達を選んでいて、先生は下の方であり、親に関して言えば、ある程度母親は相談相手になるが、父親はほとんどそれに入ってこない。様々な対応の方法があると思うが、一つは、父親が学校で起こること、学校で生徒や教師が体験することに対して、少しでも知ることのできる状況を社会的に準備していく必要がある。私は、15、6年前から家族機能活性化プログラムという支援のためのパッケージを準備して広めようとしている。未だに全然広がっていないが、少しずつ、そういうパッケージが必要とされる状況になりつつある。これは心理教育的アプローチとも言うが、積極的に人と人との関わりあい、あるいは人がどういうふうな場面でどう傷つくのかということを感じ取っていくような、ロールプレイを含めた体験プログラムだが、そういうものをもっと組織的に展開していく段階に来ていると思う。これからは、父親と担任の連携や、具体的な問題解決にあたっていくように、ある種のムーブメントの展開が必要だと思う。

また、親密な感情を共有する家族的な機能が家庭でも、教室でも、今減ってきている。そこで、カウンセリングルームを持った学校はまだ少ないが、単に個別の相談が展開される場所としてだけではなくて、家族資源センターというような、様々な支援の資料や資源情報を備えたセンター作りが必要なのではないか。学区単位あるいは教育委員会単位で、身近な子育ての悩み、あるいは学習困難に陥った生徒に対する配慮、あるいはいじめの問題を抱えた子どもへの対処を親同士で支え合うような親同士のケア・サポートあるいは生徒同士のケア・サポートも展開できるようなガイドブックとか、ネットワーク作りというようなもののセンター機能を持たせていくといいと思う。

今後ますます、従来のような事後的な、臨床的アプローチではなくて、もっと前向きで予防的な対応を主にしたカウンセリング活動の展開が期待される。そして、従来の臨床心理士、あるいはカウンセリングの専門家だけでなく、保護者の方、あるいは研究者、院生、学部生と

いった人たちも連携するための、チームワーク作りが必要だと思う。

堀田：日本でも、犯罪性の濃いいじめ事件への警察の介入やスクールカウンセラーなどの配置といった動きは公に行われているが、より予防的・教育的な働きかけは公的には行われていない。マン先生が紹介して下さったような支援パックを日本に導入することは可能なのか、その時どのような力動が起きるのだろうかと考えながら、マン先生のお話を伺った。

日本では「いじめ」という言葉は浸透し、「被害者がいじめであると感じたら、それはいじめである」というような理解も徹底している。しかし一方で「いじめはどんな場合にも絶対に許されない」という強い姿勢を打ち出し、それが生徒に受け入れられている学校は少ないのではないかと。マン先生のおっしゃるような支援パックが学校に導入されると、日本の場合に個々の学校・教師・クラス・生徒にどう染み渡っていくのか、どう受け入れられていくのかが検討を要する点になると思う。

学校臨床センターでは、高校生および高校を卒業された青年を対象に、学校時代（小学校から高校まで）のいじめに関する調査をした。その結果、7割の人がいじめられた体験があり、5割の人がいじめた経験があった。いじめられっ子といじめっ子がいるわけではなくて、いじめもするし、いじめられもしたという人たちが3割ある。いじめもするし、いじめられもしたという人たちのその時の気持ちとしては、「ここでいじめなかったら、自分がいじめられるから怖くて」というものもあるし、「あいつはやられて当然だ」といういじめもある。大人だけでなく子どもも、いじめはいけないという認識は強く感じているし、被害者がいじめと感じたらそれはいじめだとか、傍観してる人が何もアクションをおこさなかったら、それはいじめていることと同じことだという認識まではあると思う。しかし「自分は絶対にいじめはしない、許さない」という断固とした姿勢を持つことは困難である。1人の生徒がいじめられた時に、「やめよう」とか「俺はいじめに加担しない」という態度をとるまでの距離の長さを、支援パックが越えられるのか、越えるためにはどのように導入されるべきなのかというところに課題があると思う。

#### 〈討論〉

堀田：ロールプレイやドラマが正規のカリキュラムの中で、どのように取り上げられ、またどのように生徒たちに理解され浸透していったか。

マ ン：学校の中での先生に対するトレーニングを国中で行った。また、算数や歴史といった普通の学科の中でいじめを一つの切り口として使い、取りあげた。

フロア：いじめのある中学校でロールプレイをやると、いじめる子どもがとてもリアルで、逆にいじめを阻もうとする声はほとんど笑い者の対象となる。そういう現実の中、果たしてロールプレイはどのような役割を果たすのか。

藤 田：「いじめられたらどんな感じがするのかな」といった共感の感覚や愛情を作り出していくことだと思う。

フロア：家族に過度の期待がおけないという事態に学校が果たす役割についてどういう見通しを持てばいいのか。

亀 口：血縁に関わらず、親密な感情をもつ家族的な集団の場を学級や学校の中に作る。それは廊下の隅っこでもいい。家族や家庭にも連携を呼びかけて、ない力を出し合い、連携しあうのがいい。

实践事例研究会



公開シンポジウム

